

## 「稲」 令和六年三月号 第五巻第二号 通巻第三二号

令和二年九月、山田真砂年が神奈川県厚木市で創刊。師系は中村草田男、鍵和田柚子。指針は次のように記されている。「俳句は詩です。詩の方法は自由です。写生もよし、抽象や象徴もよし。自分の思想、思いを述べるのも結構です。ただ、いかなる俳句でも実感が感じられない言葉だけの俳句はよしとしません。気取らず、背伸びず、自分の言葉で自分の詩を読むことについて研鑽に努めたいと思います。」

隔月刊。

真砂年主宰は昭和六十一年、「未来図」に入会、鍵和田柚子に師事。平成七年第一句集「西へ出づれば」で俳人協会新人賞受賞。令和二年六月十一日、鍵和田柚子の逝去により「未来図」終刊、解散に伴い、「稲」を創刊。主宰に就任された。

今号の主宰「餅搗き」より

らめきです 大きなゆらぎ 小さなゆらぎ ほんの微かなゆらぎも詩です 「略」と稲俳句会で呼びかけられているが、一瞬を逃さず、集中して対象を捉える主宰の独自の眼差しを感じさせる句群に感銘を受けた。

垂穂集より

閉店の貼紙叩く空つ風

岩本 尚子

瑞穂集より

子の熱をおでこで測る文化の日

上田 信隆

秋の取や本が岩の古書店主

大坪 正美

ただ老ゆる吾に勤労感謝の日

小見戸 実

稲穂集より

小春日や優しくなる日の匂ひ

沼田 布美

切り株に貝のやうなる茸かな

飛田小馬々

雪虫に付きまとはれる喪の帰り

中村 晃也

鶴の声身ぬちに満ちて来たりけり

池田角之助

電車音遠し聖樹の灯る町

池田 美和

乾蛙の腹はばかりとはしたなく

中村 かりん

百歳の師の手づくりのマスク好き

今井 基

冬銀河賑やかに散る熟帰り

田村 チカ

長き夜や推理通りに真犯人

深野 怜

特別作品「手をつなぐやうに」より

式部の実母にあやまることはかり

飛田小馬々

富士裾を冬耕の背のまろきこと 山田真砂年  
水鳥の出払つてをり池たひら 〃  
ラグビー等の芝ぼろぼろにスクラムす 〃  
餅搗きや搗き手替はれば音変はる 〃  
一句目。富士山の三角と裾に広がる畑。そして冬の澄んだ空の下で耕す丸い背中。三つのシンプルな組合せだけで、日本画のような世界をすつきりと見事に描いて見せた作者の美意識の高さが感じられる一句。二句目。〈水鳥〉がない〈池〉を描写することで読者に〈水鳥〉のいる〈池〉を思い出させ、同時に〈水鳥〉不在の〈池〉の物足りなさ、静かさを巧みに表現。三句目。ラグビーは人と人だけでなく、人と地面とのぶつかり合いでもあった。〈芝〉が〈ぼろぼろに〉なっているという発見。オノマトペが効いている。四句目。昔は年末に一族で餅搗きをしていた。杵を振り上げる一瞬、母が臼に手を入れて餅の形を整える役をしていたが、拍子が外れて杵で母の手も一緒に搗かれぬかと心配ばかりしていた。搗句は〈餅搗き〉の音に注目し、〈搗き手〉が入れ替わると音が違うという気づきを詠まれた。なるほど音の質感、高低、リズムの違いなど人によつて微妙に違う。〈替はれば〉〈変はる〉の韻を踏んだ心地よい調子で臨場感、躍動感のある一句となった。主宰が「俳句は詩です 詩は心のゆらぎ き

生身より重き骨壺天高し 〃

手をつなぐやうに手袋はめてみる 〃

読物では棺田良枝氏の「三橋鷹女の世界 鷹女の句に対する毀誉褒貶」は、読み応えがあつた。昭和十一年九月から俳誌「紺」の女性俳句欄「青韻集」の選者を鷹女は十回続けていたが、十二年八月に突然退いた。当時の俳壇の鷹女への高まる賞賛と相反する批判を追いながら、選者辞退の理由を探っている。「感情を奔放に詠むことを力説した鷹女の選評に導かれて主観句を詠むようになっていった」投句者の自由な俳句に非難が及び、その葛藤もあつたのではないかと筆者は推察されている。

その他、エッセイ「花見どき」は高原貞夫氏、「現代俳句鑑賞」は滝代文平氏。主宰の「稲の香」は会員の一句がより一層輝きを増す丁寧な広がりのある鑑賞である。

俳誌名「稲」は、稲作が日本文化の源流であり、日本人のものの考え、見方の基調になっていることから名付けられたという。本誌の目次には稲穂、瑞穂、垂穂、稲の香、稲架日和など稲に纏わるタイトルが並ぶ。瑞々しい稲穂がやがて黄金色の美りとなるまで、これからの「稲」の御活躍を心より祈念致します。